

国際会計基準講座 イントロダクション

2009年11月27日

TAC 国際会計基準講座

国際会計基準導入の背景

- 2000年以前の国際会計基準(IAS)
 - 企業活動や金融活動が国境を越えるようになったのを背景に1973年に国際会計基準委員会(IASC)において策定を開始された会計基準
 - 各国が自国の基準を採用し、先進国同士は互いの会計基準による開示を条件付きで認め合っていたため、実務的な重要性なし
- 2001年以降の国際財務報告基準(IFRS)
 - 2000年 IOSCOに国際資本調達のスタンダードとして承認される
 - 2002年 EUが全面導入決定
 - 2005年 ヨーロッパ市場(世界最大規模の経済圏であり金融市場)において、IFRSによる開示が欧州のすべての上場企業に義務づけられる
 - 国際的な会計基準統合の流れへ
 - ヨーロッパ圏外の国も呼応し、次々に国際会計基準を導入
 - 2008年 アメリカと日本が自国基準からの切り替えの方針発表

世界で単一の会計基準として、国際会計基準が採用される

会計はどのように変わる？

- 会計処理のレベルで多くの変化
 - 会計基準の根底にある考え方の違いに起因
 - 直接金融市場が発達したイギリス・アメリカ系の会計基準の考え方の影響を強く受けた会計基準
 - イギリスやアメリカでは・・・
 - 税務会計と財務会計が完全に分離
 - 日本の会社法のような強行法規としてすべての会社に適用されるような詳細を記述した会計法がない
 - 会計基準の内容は「投資家の利用にあたっての目的整合性」に強く焦点を当てたものに
- 日本の会計基準との比較
 - 企業のリスク・リターン情報の積極的な開示
 - 公正価値による資産評価が非常に重視されている
 - その他注記情報等で開示される情報が多岐にわたる
- 恣意的な運用を避け、経済的実質が開示されるために
 - 会計基準において数値基準や例外の設定の極力回避
 - 概念フレームワーク (基本的な考え方) や会計基準の目的を提示する「原則主義」のアプローチ
 - 実務における判断の幅が非常に大きくなる

求められるスキルは？

- 本質的には、これまでと変わらない。
 - 会計基準の基本的な内容を理解する力
 - 実際の取引の実態を把握する力
 - どのように処理するかを考える力

- 国際会計基準が導入されると…
 - 「会計基準の基本的な内容」が変わってくる

- 「原則主義」を徹底する国際会計基準
 - 従来以上に現場で「考える」必要
 - 「この会計基準は何をしようとしている会計基準なのか？」
 - 「この取引の実態は何なんだろうか」
 - この作業に慣れることも重要

TACの国際会計基準講座

□ 第1部

- 国際会計基準とつきあっていくためのイントロダクション
 - 国際化会計基準のことを知る
 - 基本的な考え方や仕組みに触れる
 - 学習を進めていくために必要な知識や考え方を体系立てて整理

□ 第2部

- 個別基準の内容について紐解く
- 第1部で学習した基本的な考え方をベースとして
- 個別領域での理論展開をつながりをもって追っていく
- 2010年春入学にて開講予定

□ 基本的に扱わない内容

- 会計基準の適用に関する詳細な情報や実例、実務上の論点

最後に

□ 国際会計基準

- 現時点では、欧米の文化や歴史に基礎を置く会計基準
- ゆえに、学習は「異文化交流」のようなもの
- それが生まれてきた歴史・物語に触れることが大切

□ 世界単一会計基準という大実験

- 歴史上未だかつてない実験
- 文化や歴史の多様性を超えて、どのように各国でこれを実務に根付かせていくのかは大きなテーマ
- それは、実際に活用するそれぞれの国の会計人が決めていくこと
- 日本では、私たち日本の会計人に委ねられている

国際会計基準を学ぶことは「日本の会計の未来」を形作ることである。